ドイツ語の再帰代名詞に関する考察(1)

磯　部　美　穂

キーワード：　再帰代名詞　生物主語と無生物主語　行為の意志性

1．はじめに

再帰代名詞（Reflexivpronomen）は，日本人ドイツ語学習者にとって理解が難しい文法現象のひとつである。その理由として，再帰代名詞が使用されるドイツ語の表現を日本語に訳した場合，明示的に訳出されないという点が挙げられる。例えば，*sich vorbereiten* は「準備をする」と対訳されるが，この表現の中には，再帰代名詞と動詞，さらにはその行為者である主語との文法的な関係性が明示されていない。多くの学習者は，テキスト読解・受容の際には，再帰代名詞が含まれていることは認知することができ，熟語として学習できている場合には，その対訳をもって理解することができる。しかしながら，発話や作文など，再帰代名詞を使った文を生成することは，より意識的な認知的過程が必要となる。学習者にとって，母語である日本語には訳出されない再帰代名詞の統語的な役割を言語感覚の中に取り入れ，能動的に使用することは難しい。このことは，表現のヴァリエーションが少なく，同一テキスト内でコプラ動詞（Kopulaverb）の *sein* や助動詞 *werden* を用いた受動表現が繰り返し使用される傾向があるという学習者作文コーパスの分析結果からも確認することができる（Isobe et al. 2021; Isobe 2015）。

以上のことを踏まえ本稿では，再帰代名詞の統語的機能についてこれまでの解説書を概観し，実際の文例で表現されている意味用法について考察を試みる。再帰代名詞は，文の生成過程において統語的に重要な役割を担っており，多様な事象を言語化することができる（最上2005：165）。それは，日常的な行為（*sich die Zähne putzen*（歯を磨く），*sich anziehen*（（衣類などを）着る），*sich duschen*（シャワーを浴びる））や感情・思考（*sich ägern*（怒る），*sich wunder*n（不思議に思う），*sich interessieren*（興味がある））から非人称動詞を含む成句表現（*es loht sich*（意義がある））など多岐に渡る。これらの意味をあらわす際には，主語とそれと同一の対象を指示する再帰代名詞，さらに二つの文成分をつなぐ動詞との間にどのような意味的な関係性があるのか考察していく。

考察においては，再帰代名詞の代名詞としての機能である照応性（anaphorisch）（河原2018：111f.）も考慮し，文脈が明確である物語テキストから文例を引用する。また，必要に応じて，言語コーパス DWDS（= Ditales Wörterbuch der deutschen Sprache）[1]から文例を引用する。

[1] https://www.dwds.de（最終閲覧日：2022年10月30日）

２．再帰代名詞の記述

「再帰（reflexiv）」という語は「①再び帰ること②ヨーロッパ諸語の文法で，主語と目的語が同一者であること」（松村編1995：984）と記述され，再帰代名詞の文法的な用法についても「主語の行為の対象が主語自身（自分自身）であることを示す」（在間2017：141）という記述がおおよそ統一的な説明である。ドイツ語学習者向けの文法書においては，再帰代名詞の用法は次の二つの用法に分類され，説明されている（Helbig/Buscha 2005: 56）[2]。

Ⅰ．動詞と共に用いられる必須の再帰代名詞

ある特定の動詞と共に用いられる再帰代名詞は，他の語によって目的語を置き換えることができない。ここでの再帰代名詞は動詞に求められる必須の（obligatorisch）文成分として配置される。例えば，*befinden* は再帰代名詞と共に用いられる場合，「（場所に）ある」という意味をあらわすが（(1a)），異なる語を対格目的語とする場合には，「判定する」という異なる意味をあらわす（(1b)）。[3]

(1) a. Rodins Atelier befand <u>sich</u> im Hôtel Biron, [...]. (DlS[4]: 42)
（ロダンのアトリエはホテル Biron にあった［...］。）
b. Das Gericht [...] und befand, daß hier das freie Wort den Vorrang verdiene. (DWDS[5])
（裁判所は［...］，ここでは自由な発言が優先されると判定した。）

この用法での再帰代名詞は，対格（Akkusativ），与格（Dativ），前置詞句の中であらわれる。それぞれ下に例を挙げる。

A．対格
<u>sich</u> bedanken, <u>sich</u> beeilen, <u>sich</u> befinden, <u>sich</u> betrinken, <u>sich</u> eignen, <u>sich</u> erkälten
B．与格
<u>sich</u> aneignen, <u>sich</u> anmaßen, <u>sich</u> ausbitten, <u>sich</u> einbilden
C．前置詞句
für <u>sich</u> behalten, auf <u>sich</u> nehmen, an <u>sich</u> ziehen, um <u>sich</u> greifen
（前掲書：56）

[2] 本稿では相関的な（reziprok）用法は扱わない。
[3] 例文内の下線部は再帰代名詞を示し，正書法は原文に従う。日本語訳は筆者によるもの。
[4] DlS = „Der letzte Satz", Seethaler, Robert (2021): „Der letzte Satz", Goldmann, München. より引用した例文。
[5] DWDS = Digitales Wörterbuch der deutschen Sprache

Ⅱ．再帰構造をつくる再帰代名詞

文の中で再帰構造をつくる再帰代名詞は，他の語によって目的語を置き換えることができ，被動作主としての意味的な役割を担う。例えば，動詞 *verändern*（変える）は，主語と同一の対象を指示する再帰代名詞の場合には，「（主語が）変わる」という意味をあらわし（(2a)），主語とは異なる対象を指示する場合には，「行為を受容する」という本来の他動詞的な意味「変える」という意味をあらわす（(2b)）。

(2) a. Das Meer hatte <u>sich</u> nicht verändert. (DlS: 30)
（海は変わらなかった。）
b. Geld verändert den Charakter, das ist eine Binsenweisheit, [...]. (DWDS)
（金は人を変える，これは自明の理である［...］）

この用法の場合，再帰代名詞は対格と与格で文中に配置される。それぞれを目的語とする動詞を下に例を挙げる。

A．対格
berichtigen, fragen, kämmen, verändern, verletzten, verpflichten, verteidigen, waschen
B．与格
nützen, schaden, verschaffen, verzeihen, widersprechen

（前掲書：56）

この二つの用法を比較すると，Ⅰの用法では，再帰代名詞は形式的な再帰性（formale Reflexivität）をもつのに対し，Ⅱの用法では意味的な再帰性（semantische Reflexivität）をもつ。つまり，前者は語として形式的に置かれるべきものであり，すでに動詞の意味の一部に含まれており，後者は，動詞の目的語である被行為者としての意味を保持していると解釈される。

Paul（1986: 133）でも同様に，再帰表現について，行為と被行為者の間にある意味的関係性の明確さによって区分し，説明されている。

(3) Er hat seine Frau und <u>sich</u> selbst erschossen. (Paul 1986: 133)
（彼は彼の妻と彼自身を射殺した。）

例(3)での再帰代名詞は，動詞 *erschießen*（射殺する）という行為を受容するものであり，この文においては，行為を遂行する行為者と被行為者の意味的な関係性が明確である。これに対して，この関係性が明確ではない場合には，〔主語－動詞－目的語〕は，分離できないひとつのまとまり（Einheit）であると説明されている。このまとまりの中では，再帰代名詞は無生物の対象を指示することが多く，この〔主語－動詞－再帰代名詞〕による意味的には統合的（synthetisch）な表現方法によって，インド・ヨーロッパ語の中動態（Medium）

が置き換えられた（前掲書：133）。

また再帰代名詞は，「冗語要素」（朝賀2020：90）や「自動詞による直接的表現に代わって婉曲的表現が好まれる場合に使われる重要な要素」（志田　1990：144）と指摘されるように，自動詞の代用的表現としても使用される。

(4) a. Hier draußen gab es nur den Geruch von Stahl und Maschinenöl und den Wind, der von Norden kam und sich nie zu drehen schien. (DlS: 5f.)
（ここの外では鉄鋼と機械の油そして風のにおいしかなかった。風は北からやってきて，風向きが変わるようには思えなかった。）
b. Aber eines Morgens hatte der Wind gedreht. (DWDS)
（しかしある朝，風向きが変わった。）

例（4a），（4b）ともに「風向きが変わる」という同様の意味をあらわしているが，（4a）は動詞 *drehen* の再帰的用法であるのに対し，（4b）は自動詞の用法である。同様の用法をもつ動詞に *ändern*（変える），*bergen*（救い出す），*biegen*（曲げる），*bohren*（（穴を）開ける）などが挙げられる（Paul 1986: 133）。現代ドイツ語では再帰動詞に区分される動詞の中には，中高ドイツ語において自動詞として使用されていた語もあり（Nhd. *sich sehnen* ＜ Mhd. *sehnen*），形式的には分析的（analytisch）な言語表現への変化が，冗語的あるいは婉曲的表現とされる背景にあると推察することができる。

再帰代名詞を用いた表現が意味的観点から冗語的とされる一方で，同一の動詞で生成される文において，再帰代名詞の有無によって，文内容に含有される意味が異なる例もある。

(5) a. Er [= Gustav] grunzte und rollte sich auf die andere Seite. (DWDS)
（彼［＝グスタフ］はぶつぶつ言いながら，向こう側へ転がった。）
b. Ein Ball ist ein Ding, das rollt, manchmal springt. (DWDS)
（ボールとは，転がり，飛び跳ねたりするものである。）

例（5a）では登場人物の *er* が意志的に転がる様子が表現されているのに対し，（5b）では無生物のボールに関する辞典的な説明であり，ボールとは，*ein Ding*（ある物）が重力に従って転がるという内容をあらわしている。動詞 *rollen* は再帰代名詞を伴う場合（（5a））には，行為が主語の意志によるものという意味内容が含まれる。同様に，受動の意味をあらわす例もある。

(6) Nun mussten sie [= Sänger und Sängerinnen] lernen, sich als Teil eines umfassenden Ganzen zu begreifen und [...]. (DlS: 33)
（そして今，彼ら［＝歌手たち］は，（自分たちが）そこにある全体の中の一部である（として理解される）ということを学ばなければならなかった。）

(7) [...], das Fenster war in seinem Rahmen fest verschraubt und ließ sich nicht öffnen. (DlS: 33)

（窓は彼の空間においては固くとめられ，決して開けられなかった。）

例(6)では，動詞 *begreifen*（理解する）は，再帰代名詞を伴う文の中では，主語である行為者が「（行為者自身を）理解する」＞「理解される」＞「わかる」という意味をあらわす。動詞 *verstehen*（理解する），*zeigen*（示す）なども再帰代名詞を伴う場合，主語である行為者または対象物が「わかる」，「示す」＞「示される」＞「現れる」という意味をあらわす。例(7)では，使役動詞とされる *lassen* が再帰代名詞を伴う用法で「（行為者自らを）させる」＞「され得る」という意味が加えられる。それぞれ，様子をあらわす語句 *als Teil eines umfassenden Ganzen* と否定詞 *nicht* が共起しているが，このように再帰代名詞を伴う受動的な表現では，通常，副詞的な語句が伴う（Paul 1986: 135f.）。

以上，みてきたように再帰代名詞は，主語と同一の対象を指示するという本来の統語的な役割を担いつつ，ときに冗語要素としても機能し，その表現上の機能を拡大してきた。表現機能の拡大の中には，感情・心理的変化の表現も含まれる。例えば，動詞 *freuen*（喜ばせる）は，本来は，主語と目的語の指示対象が異なる用法が優勢であったが，現代では日常的な表現においては通常，再帰代名詞を用いて文がつくられる（前掲書：133）。

(8)　Wir freuen <u>uns</u>, daß du geboren bist. (DWDS)
（君が生まれたことを私たちは喜んでいます。）

最後に再帰代名詞の用法に関する記述をまとめると以下のようになる。

① 文の主語または（zu 不定詞句の場合は意味上の主語）と同じ対象を指示する。
② 文を形成する際に動詞の目的語として，必須の文成分として用いられる場合と必須ではない場合がある。
　1） 必須の文成分の場合，対格，与格として，また前置詞句の中であらわされる。再帰代名詞以外の語が目的語として用いられる場合，動詞のあらわす意味が異なる場合がある。
　2） 必須の文成分ではない場合，対格，与格としてあらわされる。
③ 行為者（主語）と被行為者（目的語／再帰代名詞）の間にある意味的な関係性（行為の受容）が明確ではない場合，無生物の対象物が主語となることが多い。
④ 他動詞と共に，自動詞に代わる表現として用いられることがある。その際，行為の意志性が表現されない。
⑤ 受動の意味が付加されることがある。

3．文の意味と共起成分

再帰代名詞の用法，文生成上の特徴を踏まえて，実際の文例から表現される意味ごとに再帰代名詞と共起する文成分に着目し，文の特徴を考察していく。考察の際には，自動詞の表現との相違点を確認するため，Paul（1986：135）で指摘されている行為の意志性に着目する。まずは文例の再帰代名詞を文法的役割で分析すると，物語テキスト内の100例のうち，

再帰代名詞が対格であらわれる例が77例，与格は12例，前置詞句は11例に分類される。

A．対格

⑼ Als Mahler sich aufsetzte, hielt der Falke kurz inne, um zu sehen, ob Gefahr drohte, [...] (GlS: 47)
（マーラーが体を起こしたとき，タカが（獲物をついばむのを）少し中断し，危険が迫っているかどうかを確認した。）

B．与格

⑽ Vor ihm lag ein Haufen beschriebener Notenpapiere. Das würde er sich abends am Klavier ansehen oder morgen, [...]. (GlS: 9f.)
（彼の前にはメモ用紙の山が置かれていた。それを彼は夜にピアノのそばでじっくりみるのだが，あるいは朝に［...］。）

⑾ Mahler rieb sich die Hände und [...]. (GlS: 51)
（マーラーは（自分の）手をこすり［...］。）

C．前置詞句

⑿ Der Tee war heiß, und er trank langsam. Das war das Einzige, was er heute zu sich nehmen würde. (GlS: 7)
（お茶は熱く，彼はゆっくりと飲んだ。それは彼が今日唯一口にするものだった。）

⒀ Jeder Tropfen trug den Geschmack eines ganzen Waldes in sich. (GlS: 46)
（どの水滴もその中に森全体の趣を含んでいた。）

与格の文例には，自由の与格（freier Dativ）など用法（例⑾参照）も含まれ，再帰代名詞の用法以外の異なる観点からの分析が必要となり，また前置詞句の文例の多くは熟語的表現となっていることから，本稿では扱わない。本稿では，再帰代名詞が使用される文によってあらわされる意味として，状態または状態の変化（3.1.），移動または空間的変化（3.2.），心理的・身体的変化（3.3.）の三つの表現を取り上げる。

3.1. 状態または状態の変化

それまで起きていなかった事態が生じた状態またはその変化をあらわす表現では，ある方向への移動を伴わず，ある時点での主語である行為者の動作が表現される。主語には，生物と無生物の両方がみられ，その中間的ないし比喩的な表現として，身体部位が主語となる文例もみられる。

生物主語

⒁ Seit er sich erinnern konnte, wälzte er sich durch die Nächte. (DlS: 12)
（彼は思い出すことができて以来，夜の間ずっとのたうち回った。）

身体部位

⒂ Die Wärterin sagte, ihre Zehen hätten sich bewegt wie Finger, als sie sie [= Maria] rausholte. (DlS: 27)

（助産師の女性は，彼女（＝マリア）を取り上げたとき，つまさきが指のように動いたといった。）

無生物主語

⑯ Auf dem Fenster hatte sich über den Sommer eine samtige Staubschicht gebildet. (DlS: 36)
（窓の上には夏の間ビロードのような埃の層ができてしまっていた。）

いずれも状態を引き起こす要因は言語的に明示化されてはいないものの，文脈から要因を推察または説明することができる。例⒁では，主人公の Mahler が眠っている間中 *wälzen*（のたうち回る）の状態が，なんらかの精神的な要因で生起していることは文脈に基づいて，解釈することができる。例⒂では，逆子で生まれてくる子供 Maria の足が動いていた様子が表現されている。いずれも主語である行為者ないし身体部位の所有者が，意志的に状態を引き起こしているわけではない。無生物を主語とする例⒃では，埃が自然な時間経過の中で堆積していったという状態の変化が表現されている。いずれも状態を引き起こす要因は明確ではないが，主語のもつ精神的または身体的な特性，あるいは，自然現象によるものなど背景的には存在することは推測できるものの，言語的に明示することができない，あるいは，明示するほどの重要な情報でもない。伝えられる重要な情報は，引き起こされた状態そのものであり，こうした文の伝える情報の重要性が根底にある表現方法は，受動の表現と共通することがある。

次の例⒄も同様に，行為を遂行するのは，行為者は主人公の Mahler であり，発話者でもある。ここでは動詞 *erledigen*（（任務などを）する）の意味上の行為者は明示されてはおらず，その仕事の一部が遂行されるという受動の意味が表現されている。

無生物主語

⒄ Dann hätte sich einiges erledigt. (DlS: 48)
（そして仕事のいくつかはやり遂げられるだろう。）

この情報の重要性から行為者が明示されない表現方法として，受動の表現が挙げられる。

3.2. 移動または空間的変化

移動または空間的変化をあらわす表現でも，生物と身体部位，そして無生物が主語となる文例がみられた。移動の行為をあらわす場合には，生物が主語となるが，このことは，主語である行為者の意志の存在が明確であることに起因していると考えることができる。

生物主語

⒃ [...], und die Müdigkeit in ihm war so groß, dass er sich gerne ins Gras gelegt und [...] hätte. (DlS: 41)
（[...] 彼の中の疲労は大きく，草むらの中に寝転びたいくらいだった。）

⒄ [...], als Claire sich vorsichtig von hinten näherte, (DlS: 49)

（[...]，クレアが注意深く後ろから近づいたとき）

⒅ ≫ Der Meister ist fertig. ≪ , sagte Claire und erhob sich von ihrem Stuhl. (DlS: 50)
（「ご主人様は終わりました。」とクレアはいって椅子から立ち上がった。）

例⒃，⒄では，それぞれ共起成分の副詞 *gerne*（喜んで），*vorsichtig*（注意深く）が行為者の心的態度をあらわしており，移動することに対する意志，少なくとも否定的ではない態度で遂行されている様子を解釈することができる。例⒅では主人公の Mahler に向かって仕事が終わったことを告げた後に立ち上がる様子が描写されており，意志なく遂行されている動作とは解釈できない。

生物が主語となる表現に対して，無生物が主語となる場合には，行為の意志性つまり人為的な力は介在することなく，重力に従う物理的に自然な現象が描写される。

無生物主語

⒆ Die nadeldünnen Nägel lösen sich im Holz [...]. (DlS: 20)
（針のように薄い釘は木の中で外れた［...］。）

⒇ Er dachte daran, wie schnell sich damals die Unruhe im Opernhaus über die ganze Stadt ausbreitete. (DlS: 34)
（彼は考えた，当時のオペラハウスの動揺が都市全体にどれほど早く広まったかを。）

例⒆，⒇はいずれも物理的な自然現象に逆らうことなく，事象が生じている様子が描写されている。同様の例として，前掲の例（4a）も参照されたい。

3.3. 心理的・身体的変化

感情表現は，再帰代名詞が用いられる表現として代表的なもののひとつである。ここでは身体的な変化も含め，心理的・身体的変化をあらわす表現をみていく。この表現では，当然ながら生物主語しかみられない。さらに心理的な変化，身体的な変化共に主語である行為者の意志が，少なくとも物理的，直接的には介在することない。

(21) Er träumte viel, und obwohl er sich an seine Träume am nächsten Morgen kaum erinnern konnte, [...] (DlS: 12f.)
（彼はよく夢を見る，次の日の朝には見た夢をほとんど思い出すことができないにもかかわらず［...］）

(22) Er läutete mit der kleinen Handglocke, und wie immer wunderte er sich, dass nur wenige Augenblicke später der Junge auftauchte. (GlS: 23)
（彼は小さなハンドベルで鐘を鳴らし，そしていつものように不思議に思った，わずかな時間しか待たずにすぐに少年が現れることを。）

(23) Ihre Schwester Anna war ein paar Tage zuvor an Scharlach erkrankt und wegen

der Ansteckungsgefahr zu den Großeltern gebracht worden, wo sie sich schnell erholte. (DlS: 29)
（（マリア）の妹のアンナが数日前に猩紅熱に罹り，感染の危険があったため祖父母のところに送られた，そこで彼女は早々に回復した。）

例㉑の主語である行為者が自らに *erinnern*（思い出させる）という行為は，物理的になんらかの影響が与えられた結果生じる事象ではなく，その遂行の過程は，言語化できない。例㉒でも同様に *wundern*（不思議に思わせる）という行為が，なんらかの論理的に説明できる因果関係の結果で引き起こされる事象であったとしても，行為者が意志的に引き起こすものではない。例㉓でも，身体を *erholen*（快復させる）ことの要因には，行為者の意志も含まれる可能性はあるが，それ以外の複数の要素，ここでは祖父母の家に移動したことが含まれている。

以上，再帰代名詞による三つの表現について，主語の性質と行為に含まれる意志性について考察をおこなった。被行為者になんらかの影響を与えるという作用は，他動詞のもつ性質のひとつであるが，被行為者が行為者自身である場合，つまり再帰代名詞の場合には，行為者の強い意志に基づいて直接的に生起されているというわけではなく，間接的な要因によって事象が生起されている。事象が生起する背景には，行為者の個々の性質や自然の摂理といった言語外世界の事象が関連しており，再帰代名詞で表現される事象の原動力は，言語的に明示化できない，また，その必要性も低い。行為者と被行為者の関係性よりも，事象そのものに視点が向けられた表現であるともいえる。

4．おわりに

再帰代名詞の用法として，主語と同じ対象を指示する代名詞であるという説明以上の文法的な記述は困難である。今回の文例分析から，再帰代名詞を用いることによって，文の中に含まれる，言語的に明示化されない情報が多く，また日本語への訳出が困難であるということも改めて確認することができた。特に，無生物を主語とする他動詞を使った表現や，自身を被行為者として，心理的・身体的変化をあらわす表現は，日本語話者にとっては，言語感覚として習得するのは難しい。というのも通常，日本語では「風が吹く」，「思い出す」など行為を受容する被行為者は言語的に明示化されない。

本稿では，他動性（Transitivität）といった専門的な用語は使用せず，再帰代名詞が使用される際には，明示的に表現されない背景があることを説明することで，理解を深めることを試みた。再帰代名詞を使った表現を行為の遂行や事象の生起の過程の言語化の一例とし，ドイツ語表現の選択肢として提示できるよう，今後も分析を続けていきたい。

使用テキスト

Seethaler, Robert (2021): „Der letzte Satz", Goldmann, München.

参考文献

朝賀俊彦（2020）:「前置詞句内の再帰代名詞に課される意味的制約について」In：『人間発達文化学類論集』第32号，87-99.

Helbig, Gerhard/Buscha, Joachim (2001): *Deutsche Grammatik. Ein Handbuch für den Ausländierunterricht*. Langenscheid. Berlin und München.

Isobe, Miho (2015): *Ein Schritt zum wissenschaftlichen Schreiben auf Deutsch. Eine Fallstudie: Verfassen eines Leserbriefs*. In: NU Ideas, Vol. 4.2., 93-100.

Isobe, Miho et al. (2021): *Similarities and Differences in Correction Operation. Quantitative and Qualitative Analysis based on a Learner Corpus*. In：『信州大学人文学部人文科学論集』第８(2)号，81-89.

河原宏之（2018）:「再帰代名詞における同一指示解釈の可能性」In：『独協大学外国語学部交流文化学科紀要』，第６巻，109-121.

志田　章（1990）:「再帰代名詞と Intransitiv について：心理学的一考察」In：『独逸文学』34巻，137-157.

松村　明編（1995）:『大辞林』第二版，三省堂

最上英明（2005）:「ドイツ語の再帰代名詞をめぐって―コンサート批評記事の用例―」In：『香川大学経済論叢』第78巻第３号，155-166.

Paul, Hermann (1968): *Deutsche Grammatik III*. Niemeiyer. Tübingen.

在間　進（2017）:『リファレンス・ドイツ語』第三書房

参照 URL

https://www.dwds.de（最終閲覧日：2022年10月30日）

（2022年10月31日受理，11月10日掲載承認）